

## あいさつするのも悪くない

呉市の小中学校では、年に二回、いつせいに、「いじめ撲滅キャンペーン」を行っている。ぼくたちの学校では、各クラスでいじめのない学校・学級にしておくためにどのようなことをしていくのかを話し合い、その時決まったことに取り組んで感想を交流し合うことになっている。

六年一組では、先生が「いじめ撲滅キャンペーン」が行われるようになったわけや、いじめは絶対にゆるされないという話をされた後、学級で取り組むことを話し合った。

ポスターを作って呼びかけることやみんなで遊ぶ時間を設定することなど、たくさん意見が出されたが、直接多くの人たちとふれ合うことができるという意見に賛成する人が多く、毎朝校門やくつ箱の前など、いくつか場所を決めて七時三十分からあいさつ運動をすることに決まった。

この取組に決まった時、ぼくは正直いやだった。朝早く登校しなければならぬということもあるが、人にあいさつをすることが苦手だったからだ。自分から人に話しかけることがはずかしいのだ。（いやだなあ。やりたくないなあ。）

心がどんどん重くなってきた。考えてみれば、今まで「あいさつをしよう」という生活目標もあったが、ほとんど意識して取り組んでこなかった。それどころか、自分から先にあいさつをした記おくなど一度もない。

ぼくが後ろ向きなことばかり考えているうちに、あいさつ運動をキャンペーンが始まる来週の月曜日から始めることや、みんなで曜日と場所を分担して行うことなど、どんどん具体的な方法が決められていった。気づくと、ぼくは月曜日と水曜日の裏門の当番に決まっていた。

月曜日、ぼくはねむい目をこすりながら重い足取りで登校した。七時三十分ぎりぎりに裏門に着いた。立ち始めて五分くらいはだれも姿を見せなかったが、しばらくして三年生の男の子が登校してきた。その子は門の前に立っているぼくの姿を見て、最初どきどきとした表情を見せたが、その後、ターツとにげるように走って通り過ぎて行った。ぼくは通りぎわに、

「おはようございます。」

と言ってはみたが、あいさつは返ってこなかった。それからしばらくして、低学年の女の子たちが楽しそうにおしゃべりをしながらやってくる。ぼくはまた通りぎわに、

「おはようございます。」

と言ったが、話に夢中なのか、おしゃべりをしながらそのまま通り過ぎて行った。結局この日は、五十人くらいの人に、

「おはようございます。」  
と言ったが、五、六人の人があいさつを返してくれただけだった。  
ぼくは、水曜日の当番がますますやりたくなくなってきた。

次の日、ぼくは八時前に家を出た。ぼくの家から学校までのきよりは十分足らずだ。正門へ向かう角にさしかかったとき、門の方から、

「おはようございます。」

という元気のいい声が聞こえてきた。すると、ずっと前を歩いていた中学年の男の子がちょうど山びこが返るように、

「おはようございます。」

と、大きな声であいさつを返した。今日の正門の当番は花子だった。花子は、門を通る五メートルくらい手前から笑顔で相手の顔を見ながら元気よくあいさつをしていた。中には小さな声であいさつを返す人もいたが、そんな人には、

「今日もがんばろうね。」

と、声をかけていた。かけられた方も「にこっ」と笑顔でうなずいて門を通り過ぎていた。だんだん門が近づいてきた。

「たかし君、おはようございます。」

五メートルくらい手前で花子がにこしながら声をかけてくれた。ぼくは花子の笑顔につられるように、

「おはよう。」

と、あいさつを返した。その時ぼくは、うれしいようなはずかしいような不思議な気分がした。

水曜日、ぼくは大急ぎで朝ご飯を食べ終わると、走って学校に向かった。誰もいない教室にランドセルを置くと、七時二十分に裏門に立った。七時三十分を過ぎたころ、この前走って通り過ぎて行った三年生の男の子の姿が見えた。ぼくは思い切って大きな声で、

「おはようございます。」

と、あいさつを試してみた。すると男の子は、いったん立ち止まってキョトンとした表情でこっちを見たが、すぐに笑顔で、

「おはようございます。」

と、あいさつを返した後、はねるようにして門を通り過ぎて行った。ぼくは、いつもより青くすんだ空を見ながら、

（あいさつするのも悪くない。）  
と思った。

